

# 特集 森づくりを支える力

昭和52年（1977）に始まった「しれとこ100平方メートル運動」。この32年間、約6万2千人の方々の寄付（約7億1千万円）をもとに、土地の買い取りが進められ、現在ではその守られた土地で森づくり作業が行われています。



この運動は、運動参加者の皆さんや交流事業参加者の方々（6ページ参照）の他にも、ボランティアの皆さん、地元の皆さん、運動に賛同する企業や団体、その他たくさんの人の力によって支えられています。今回はこの運動を支える支援の輪について紹介します。

## 運動を支える支援の輪

この運動の開始当初に設立された100平方メートル運動推進関東支部と関西支部の皆さんには、それぞれの地域での運動の普及活動や交流事業への協力など、多大なご支援をいただいています。また、平成9年(1997)に設置した森林再生専門委員会

議では、動植物の専門家と地元の有識者で構成される委員の方々から森づくりに関する助言や提言をいただいています。また現在、運動開始から32年間の軌跡をまとめる編纂作業が進められています。知床の自然保護のみならず、日本のナショナルトラスト運動の先駆けとしても重要な役割を果たしてきたこの運動の歴史を、後世へと引き継いでいくことを目的として



森林再生専門委員会による、運動地に隣接する国有林内の防鹿柵の調査。この柵はこの委員会の提言を元に林野庁によって設置された。



## ボランティア

森づくり作業にはなくてはならないボランティアの皆さんの力。昨年度は27名の方に、のべ約100日分の作業をこなしていただきました。雨の日も雪の日も、野外作業へと張り切って向かうボランティアの皆さんは心強い限りです。限られたスタッフだけでは成し得ないほどの作業を進められるのも、ボランティアの皆さんの力があってこそです。



小雨の中での防鹿柵修繕作業。掘る人、打つ人、支える人分業して効率的に作業を進める。



雪の中での樹皮保護ネットのメンテナンス作業。夏にできない作業は冬に行う。

## 企業・団体

運動の主旨に賛同していた企業や団体の皆さんにも、知床を訪れ森づくり作業に関わっていただく機会があります。昨年度はその道のプロの日本植木協会青年部会42名の皆さんに高度な技術を発揮していただき、またイオンチアーズクラブの子どもたち34名が知床の自然と森づくりを体験しました。



日本植木協会青年部会による苗の「根巻き」。造園の技であつという間に完了。



イオンチアーズクラブによる苗畑の除草作業。仕事の成果を囲んで記念撮影。

## 学校

知床の自然やこの運動を伝えることも森づくり作業とあわせて行っています。毎年たくさんの若い世代がこの森を訪れ様々な経験を



人海戦術による旧開拓家屋の片づけ作業。(酪農大実習)

していきます。昨年度も毎年恒例の地元斜里高校1年生の自然体験学習や酪農学園大学と専修大学北海道短期大学の学生実習などを受け入れました。



地元高校生101名が知床の大地に植樹を行う。(斜里高校自然体験学習)

## 地元

運動を進めるサクラマス復元の取り組みでは、地元の(社)北見管内さけ・ます増殖事業協会の皆さんに現場での指導や助言などのご協力をいただいています。また、昨年度は同協会の事業の一環として、運動地内を流れる岩尾別川の



改修前①と改修後②の岩尾別川の河川工作物。ダム段差が解消され、サケやマスが上流まで遊べるようになった。



改修前①と改修後②の岩尾別川の河川工作物。ダム段差が解消され、サケやマスが上流まで遊べるようになった。

## 旧開拓農家の家屋修繕

平成20年(2008)秋、100平方メートル運動地に現存する最後の開拓家屋の修繕が行われました。運動の基本方針は全てを自然に戻すことを前提にしていますが、運動の始まりとは切り離せない知床開拓の歴史を残すために、この家屋を保存することになりました。修繕といっても、トタン屋根や外壁、基礎の土台の交換と傾いた玄関を立て直すという最低限なものです。これでひとまず倒壊の恐れはなくなりました。建物内部は、残された当時の生活用品の整理と朽ちた畳などを片付ける程度で基本的にはそのままになっています。この家屋は、1960年代後半まで

実際に生活の場として使われていました。それほど遠くない昔、この知床にも人々の暮らしがあったこと、そして100平方メートル運動が始まり現在へと続いていることなど、この残された建物を通して、知床の人の歴史を未来へ伝えていきます。



改修後の旧開拓家屋。崩れていた玄関部分も復元された。



前斜里副町長関根郁雄さん(現知床財団理事長)が中心となって過去32年間の膨大な資料を整理している。